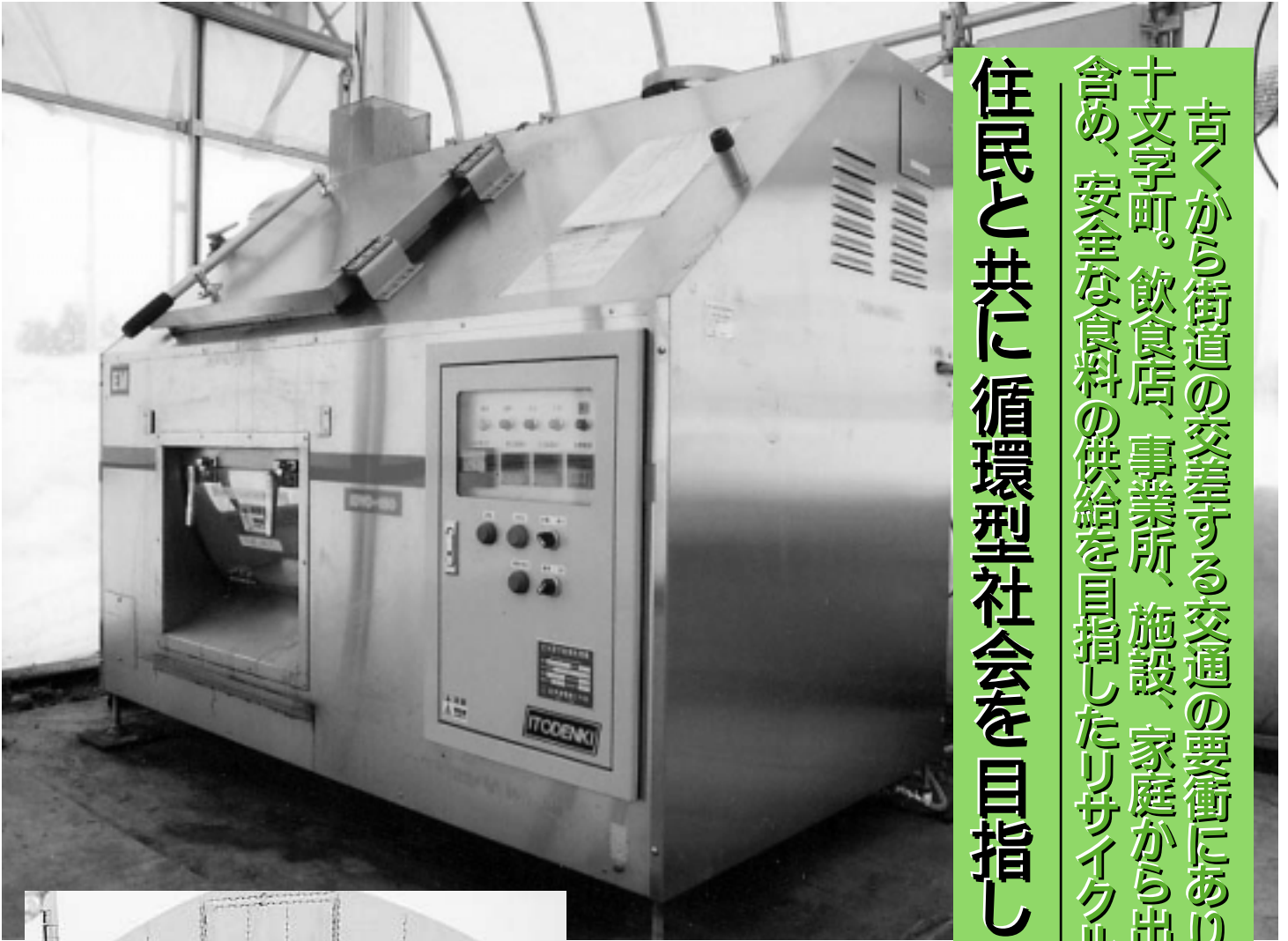


10時間かけて100キロの生ゴミを約30キロに乾燥させる「生ゴミ乾燥処理機」。さらにクラッシャーにかけ粉末状の堆肥を作ります。



古くから街道の交差する交通の要衝にあり、周辺地域の町部として人の集まる十文字町。飲食店、事業所、施設、家庭から出る生ゴミを資源として、地産地消を含め、安全な食料の供給を目指したりサイクル社会の構築に取り組んでいます。

住民と共に循環型社会を目指した取り組み（十文字町）

生ゴミの再資源化と
安全な食料の供給

「狸々の左は湯沢、右は横手、うしろは増田、まえは浅舞」。文化8年（1811年）、増田村通覚寺の天端住職が羽州街道と増田・浅舞の驛路の交差点に建立した道標像の中



越前地内のEM生ゴミ乾燥処理実験ハウス外観

心に集落が誕生・拡大し、地域交通の一大要衝となった十文字町。時代の変わった現在でも十文字ICを中心に国道13号、342号、397号、主要国道等が東西に伸びており、近隣市町村における流通の拠点的性格は変わりません。立地条件に恵まれるため、もとも商業も発達しており、近年新しい商店街が形成されるなど広域圏での展開も見られます。

各家庭や特養、給食センター等の各施設に加え、こうした商業地区の飲食店や食品加工販売店等各事業者から出る生ゴミを資源としてリサイクルしようとして試みられているのが同町の「有機性資源循環利用システム確立事業」です。

これらを主原料として良質な堆肥の生産を行い、土壌に還元することによって農業や化学肥料を極力抑えた、安全な



循環型社会の構築に積極的な小川健吉町長

平成13年度に入り、本格的な試験運用が開始されます。

小規模試験運用による 堆肥づくりと有機農法

農産物を町民に供給し、ひいては地域内の「産地地消」を促進する、自然循環機能の増進が狙いです。
これに向け、町では平成12年度に町、消費者、農業関係者等で組織する「資源循環推進協議会」を立ち上げ、コンポストの有効利用等に関する調査・研究を始めました。また、実践に先立ちモデルエリアとして上佐吉開地区を選定モニターとなる家庭約60軒に生ゴミの分別収集について協力を依頼しました。



各家庭に配布された予備発酵用EMバケツ(右)

モニターとなった家庭では配布された「EMバケツ」に生ゴミを蓄積し、発酵促進剤「EMボカシ」を投入します。これにより予備発酵が始まり、生ゴミはほぼ無臭化します。こうして生成した原料を週2回、地区内に準備された大型の指定バケツに移します。

町はこれを回収し、堆肥化ミニプラント「EM生ゴミ乾燥処理実験ハウス」に運び込み、乾燥処理します。
ここに設置された乾燥処理機は、一度に100キロもの生ゴミを約10時間かけて、水分含量がほぼ11%になるまで乾燥させます。一回の運転に要する燃料は灯油約10リットル。これをさらにクラッシュヤーで粉末状にする



と有機性の堆肥「コンポスト」が完成します。こうしてできた堆肥を用いて、実験ハウス裏手に設けた約3アールの実験圃場で実際に大根や白菜、人参、ほうれん草等の農作物栽培を開始。秋に収穫検査を実施し、概ね良好な結果を得ることができました。今後は生産量を把握した上でモデル農家に供給し、利用してもらつていきます。

地域住民の意識高揚と 循環型社会の構築

「焼却にお金をかけて処分していた生ゴミを資源として再利用し、さらに生産物に安全性という付加価値を加えることは、使い捨ての時代が過ぎ去った現代

同事業は、県政の課題に取り組むため昨年度県に設置された「チーム21」によるモデル事業としても調査・研究等で支援を受けています。
小川健吉町長は、



栽培実験圃場での収穫検査(11月)

の理に通った取り組み。モデル家庭はもとより、行政懇談会等での町民との対話でも、同事業への関心の高まりを感じています。将来的には全ての廃棄物がリサイクルの円上に乗るよう、地域規模の再資源化・環境保全を検討していきたいと考えています」と、
循環型社会の構築に向け積極的な考え方をもちます。
計画では14年度に同事業を全町に拡大するための検討が行われるほか、3町及び周辺町村との共同も視野に入れています。今後他の地域においても普及が予想される根幹的な取り組みだけに、同町の動向が注目されています。